

ソーシャルワーカーであることの不確かさ

—ソーシャルワーカーの実践と学びの検討を通して—

○ ルーテル学院大学 氏名 浅野 貴博 (5863)

キーワード: ソーシャルワーカー, 専門職としてのあり方, ナレッジベース

1. 研究目的

今日の急速に変化する支援環境において、ソーシャルワーカー（以下 SWer）を始めとした対人援助職は、様々なレベルにおける不確実性（uncertainty）に向き合うことが求められる。対人援助の文脈においては、エビデンス・ベースド・プラクティス（EBP）の大きな影響の下、不確実性は管理すべき、さらには避けるべきものと捉える見方が広がっている。そこではリスクマネジメントの考え方にに基づき、専門職による実践のやり方を様々なレベルにおいて規制するという向きがますます強まっている。

不確実性に対し、管理し最小化すべきものと捉える見方の一方で、不確実性は日常の支援の一部であり、さらにクリエイティビティの重要な源泉として捉える見方がある（e.g. Fish, 1998; Higgs and Titchen, 2008）。不確実性に対するそうした見方は、Schön（1983）まで遡ることができる。Schön（1983）は、専門職が現場で行う様々な判断には必ずある程度の不確実性が関わっているとした上で、判断をする上での専門職のアーティスティックな側面の重要性を強調している。こうした不確実性に対するオルタナティブな見方は、実践者が高めるべき専門性（expertise）の捉え方についても、その射程を広めることを我々に求める。本研究では、上記のような不確実性に対する対照的な見方が、SWerとしてのアイデンティティにどのような影響を与えているかを考察する。

2. 研究の視点および方法

本研究では、SWerが日々の支援活動の文脈の中で不確実性をどう捉え、どのように向き合っているのかについて明らかにするために、SWerの専門職としての学びに焦点を当て質的研究を実施した。研究対象者は、社会福祉士または精神保健福祉士を有し、社会福祉関連の現場で10年程度の実践経験のある計26名のSWerであり、フォーカスグループと個別インタビューを組み合わせたインタビュー、さらに調査協力者（以下協力者）が関わる様々な学びの場（e.g. 研修や援助職同士の自主的な勉強会等）において観察を実施した。データ分析に関しては、協力者によって語られたSWerとしての様々な経験のストーリーをホリスティックに捉えるために「Thematic narrative analysis」（Riessman, 2008）を用いた。

3. 倫理的配慮

調査の実施にあたり、調査目的や方法、匿名性の確保、結果の公表などについて、協力者に口頭及び文書で説明し、協力の同意を得た。また、調査の実施前に、筆者の所属先であったイギリスのヨーク大学ソーシャルポリシー&ソーシャルワーク学部に設置されている倫理委員会の承認を得た。

4. 研究結果

支援活動における不確かさは、多くの協力者にとって SWer としての自らのアイデンティティの不確かさにつながっていたが、そうした SWer であることの不確かさは、SWer の専門職としての役割の見えにくさ、そしてソーシャルワーク実践における”エビデンス”の不確かさからもたらされていることが分かった。支援活動における不確かさをどう捉えるかは SWer 一人ひとりによって異なり、その捉え方がそれぞれの SWer としての支援のやり方、さらには「専門職としてのあり方 (Professional ways of being)」(Dall’Alba, 2009) に反映されている。不確かさに対する向き合い方については、3つのタイプ（確かさを求めて；不確かさの受入れ；確かさと不確かさの間でのバランス）に分けられ、それぞれの「SWer としてのあり方 (Ways of being a social worker)」が彼らの学びにも影響を与えていることが明らかとなった。SWer の支援活動、SWer としてのあり方、そして SWer としての学びのあり方は、彼らが専門職として拠って立つ”価値”，すなわち何に重きを置くかということと分ちがたく結び付いているといえる。

5. 考察

SWer の役割が何であるかという、今も続く根本的な問いは、SWer が専門職として何の知識を用いるべきかという問いと関連している。専門職のナレッジベースは大きくフォーマル、そしてインフォーマルナレッジに分けることができるが、SWer のナレッジベースをフォーマルかインフォーマルに分ける見方は、どちらが上位の知識の形態かという二者択一の議論になることが避けられず、SWer の支援活動の多層性の誤った理解につながりうる。SWer の幅広いナレッジベースを理解する上で、両者を「相反する (competing)」ものとしてではなく、「相補的な (complementary)」ものと捉えることが重要である。

<文献>

Dall’Alba, G. (2009) Learning professional ways of being: Ambiguities of becoming, Educational Philosophy and Theory, 41, 34–45.

Riessman, C. K. (2008) Narrative methods for the human sciences, SAGE Publications.

Schön, D.A. (1983) The reflective practitioner: How professionals think in action, Basic Books.